

展示におけるフィクション活用の試み

—ふくしま復興展「ふくしま平安ものがたり」を例に—

笠井 崇吉

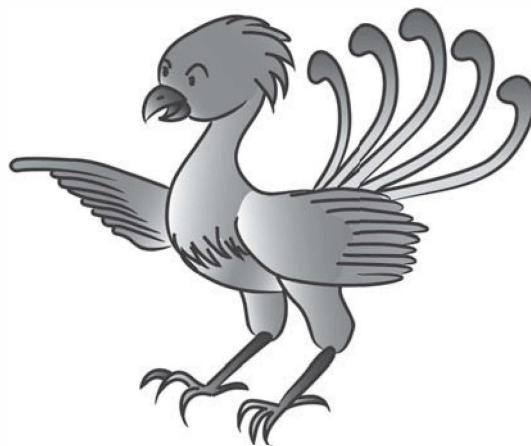
1 はじめに

平成28年7月23日（土）～9月25日（日）の日程で、まほろん特別展示室において開催したふくしま復興展「ふくしま平安ものがたり」は、開催期間が夏休みシーズンに当たっていたこともあり、展示観覧者の対象を小学生として企画した展示であった。筆者は主担当としてこの展示に関わったが、展示を組み立てていくにあたり、小学生の興味を引き、展示内容を理解しやすくすることを意図して、フィクション（創作物語）による展示の時代観紹介やイメージキャラクターの利用等これまでの企画展では実施してこなかった解説手法を試みた。本稿では、これらの手法の事例を報告し、展示の理解を促す補助素材としてフィクションを利用する効果について考えていきたい。

2 展示の経緯

今回の企画展は、①「ふくしま復興展」として開催すること、②福島県の平安時代を扱うこと、③古代の製鉄を取り上げること、④子供向けの内容にすること、という4つの前提条件に基づいて内容を企画した。①については、東日本大震災と原子力災害からの心の復興を目的とした展示であることを考慮にいれ、平安時代に東北地方の太平洋側を襲ったとされる貞観地震^{じょうがんじしん}と、そこからの復興を何らかの形で展示内容に盛り込めないか検討した。②、③については、まほろん収蔵資料の中から平安時代や製鉄にかかわる考古資料を選出するとともに、近年の発掘調査で出土した資料も展示の構成に加えた。また、まほろんの復元研究で作られた復元品も展示に取り入れることとした。④については、小学生が展示に馴染みやすくするよう、解説文に極力ルビをふることとし、展示のナビゲーターとしてイメージキャラクターを作ることとした。イメージキャラクターは、展示品である栗木内遺跡出土鏡に鋳出された鳳凰を元にデザインし、名前は鳳凰の「ホウくん」（図1）とした。

展示解説については、観覧者にホウくんが語りかける形で展開させることとし、さらに日本史や考古学に予備知識のない小学生が平安時代の雰囲気^{ふこうのともがら}を理解できるよう、架空の人物を主人公とした物語を創作することにした。



3 展示の構成

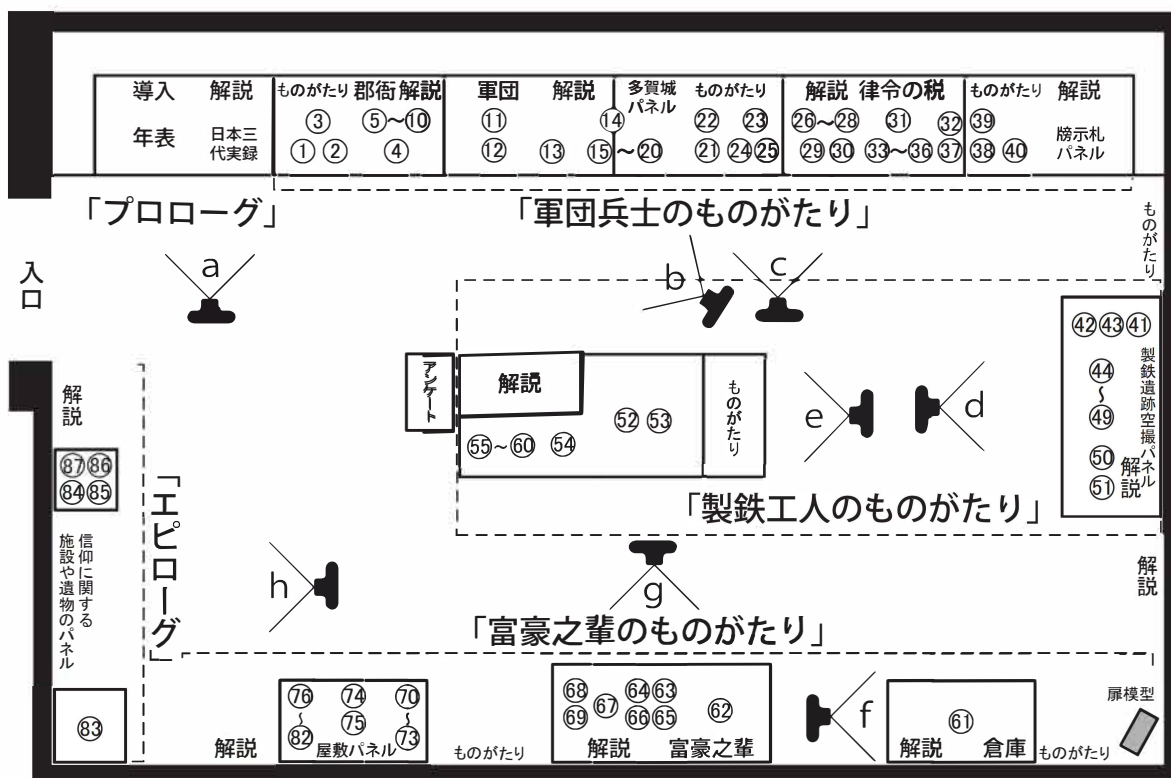
今回の展示では、全体を「軍団兵士のものがたり」、「製鉄工人のものがたり」、「富豪之輩^{ふごうのともがら}のものがたり」と題する3つのコーナーに分け、これに

図1 イメージキャラクターホウくん

プロローグとエピローグが付属する構成とした（図2、表1）。

プロローグは、平安時代の年表と解説パネルのみで構成した（図3a）。ホウくんの自己紹介からはじまり、観覧者に平安時代のイメージについて問いかけ、国風文化に代表される都を中心とした華やかなものとは異なる、福島県域の平安時代についてのイメージを想起させることを意図してパネルを作成した。年表は、東京書籍の小学生用教科書『新編新しい社会6上』と中学生用教科書『新編新しい社会歴史』から平安時代の部分を抜粋して作り、小中学校での学習内容に平安時代の扱いが少ないこと、東北地方については、中学校教科書にわずかに記載があるだけであることを示した。このほか、「軍団兵士のものがたり」への展示の流れがスムーズに移行するよう、平安時代前半の社会制度を規定していた律令制についての解説と、貞観地震に関連する『日本三代実録』^{にほんさんだいじつろく}巻十六の貞観11年5月26日の記事を掲示した。

「軍団兵士のものがたり」は、奈良時代から続く律令制下における一般庶民の生活を紹介するコーナーで、平安時代の初期における福島県の中通り地方を舞台とするストーリーとした。コーナーは前・後半の大きく2つに分かれており、前半は、地域支配の中心である郡衙^{ぐんが}と、陸奥国に残置された軍団と兵役について取り上げた。郡衙については、白河郡衙に比定される関和久官衙遺跡出土の硯、墨書土器、灰釉陶器、緑釉陶器、焼米、古代の文房具の復元品を展示し、関和久官衙遺跡の想定復元図を作成した。軍団については、まほろんが収蔵する旅装の軍団兵士像と兵士の装備品・甲冑・弩の復元品のほか、蕨手刀・鉄鉾・鉄鎌等の鉄製武器類を展示した（図3b）。軍団兵士像については、養老軍防令備戎具条掲載の個人用装備すべてを着用させ、展示機会の少ない「火」単位の装備品も併せて展示した。後半は、軍団兵士の担い



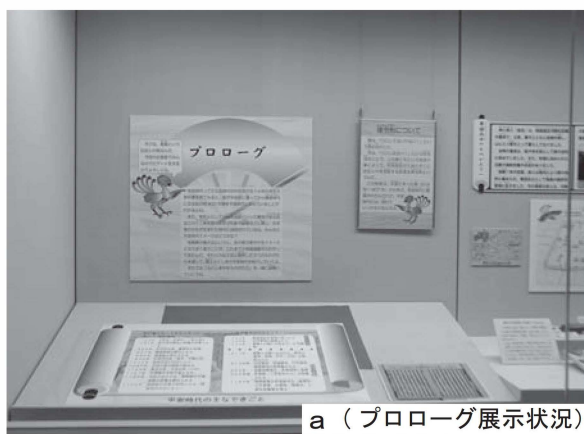
* 丸数字は展示品の番号 図3写真の撮影位置

図2 展示配置

表1 展示品一覧

	展示品名	遺跡所在地	出土遺跡名		展示品名	遺跡所在地	出土遺跡名
1	灰釉陶器・緑釉陶器	泉崎村	関和久官衙遺跡	45	獣脚鋳型	相馬市	向田 A 遺跡
2	炭化米	泉崎村	関和久官衙遺跡	46	獣面獣脚鋳型	相馬市	向田 A 遺跡
3	円面硯	泉崎村	関和久官衙遺跡	47	模様のある板状の鋳型	相馬市	向田 A 遺跡
4	墨書土器	泉崎村	関和久官衙遺跡	48	大型容器鋳型	相馬市	向田 A 遺跡
5	円面硯	復元品		49	梵鐘鋳型	相馬市	向田 A 遺跡
6	須恵器転用硯	復元品		50	梵鐘	復元品	
7	筆	復元品		51	獣脚付き容器	復元品	
8	白河団記載木簡	復元品		52	長方形箱形炉の壁	南相馬市	割田 H 遺跡
9	刀子	復元品		53	炉底滓	南相馬市	割田 H 遺跡
10	漆紙文書	復元品		54	円形小型炉の壁	南相馬市	天化沢 A 遺跡
11	旅装の軍団兵士像	復元品		55	容器形の土製品	南相馬市	大迫遺跡
12	軍団兵士装備品一式	復元品		56	鏡形土製品	南相馬市	鳥打沢 A 遺跡
13	弩	復元品		57	鏡形土製品	南相馬市	大迫遺跡
14	鎧	復元品		58	円板形土製品	南相馬市	割田 H 遺跡
15	小刀	石川町	達中久保遺跡	59	鐘形土鈴	南相馬市	割田 C 遺跡
16	蕨手刀	泉崎村	観音山北横穴墓	60	土鈴	南相馬市	割田 C 遺跡
17	鉄鏃	南相馬市	割田 C 遺跡	61	井戸枠転用扉板	会津若松市	鶴沼 C 遺跡
18	鉄鏃	三春町	光谷遺跡	62	コロバシ	会津若松市	西木流 C 遺跡
19	刀子	矢吹町	北大久保 B 遺跡	63	火切り板・揉み切り	喜多方市	高堂太遺跡
20	鉄鉾	いわき市	大猿田遺跡	64	弓	湯川村	桜町遺跡
21	土師器杯	白河市	佐平林遺跡	65	須恵器長頸瓶	湯川村	桜町遺跡
22	土師器甕	郡山市	正直 A 遺跡	66	矢	会津若松市	西木流 C 遺跡
23	土師器甕	矢吹町	北大久保 B 遺跡	67	斎串	会津若松市	西木流 C 遺跡
24	燈明使用土師器杯	玉川村	江平遺跡	68	舟形木製品	会津若松市	鶴沼 B 遺跡
25	漆付着土師器杯	玉川村	江平遺跡	69	鋤形木製品	会津若松市	鶴沼 B 遺跡
26	須恵器壺	石川町	達中久保遺跡	70	墨書土器（渦巻き）	会津若松市	鶴沼 B 遺跡
27	土師器壺	石川町	達中久保遺跡	71	墨書土器（人面）	会津若松市	鶴沼 B 遺跡
28	須恵器長頸瓶	白河市	佐平林遺跡	72	墨書土器（「財」）	会津若松市	鶴沼 B 遺跡
29	土師器耳皿	白河市	佐平林遺跡	73	墨書土器（「吉集」）	会津若松市	鶴沼 C 遺跡
30	須恵器 壺	矢吹町	北大久保 B 遺跡	74	三脚土器	会津若松市	西坂才遺跡
31	古代の農具（鎌・鋤・鍬）	復元品		75	有文円面硯	会津若松市	西坂才遺跡
32	紡錘車	復元品		76	帯金具	郡山市	柿内戸遺跡
33	鉄製鍬先	矢吹町	上宮崎 A 遺跡	77	帯金具	郡山市	正直 A 遺跡
34	鉄製鍬先	須賀川市	関林 D 遺跡	78	墨書土器（「大私」）	会津若松市	屋敷遺跡
35	鉄製鎌	会津若松市	鶴沼 B 遺跡	79	墨書土器（「倉人」）	会津若松市	鶴沼 C 遺跡
36	鉄製紡錘車	南相馬市	割田 H 遺跡	80	墨書土器（「戸主」）	会津若松市	鶴沼 C 遺跡
37	曲物	喜多方市	高堂太遺跡	81	墨書土器（「田主」）	会津若松市	鶴沼 C 遺跡
38	土錘	白河市	谷地前 C 遺跡	82	刻書土器（「今来」）	会津若松市	西木流 C 遺跡
39	たも	福島市	御山千軒遺跡	83	仏教関連の土器（一括）	南相馬市	天化沢 A 遺跡
40	たも	復元品		84	銅鏡（2面）	石川町	古宿遺跡
41	現代の取鍋鉄製			85	銅鏡	玉川村	栗木内遺跡
42	鉤状の鉄製品	南相馬市	長瀬遺跡	86	銅鏡	復元品	
43	土製取鍋	相馬市	向田 A 遺跡	87	青銅製仏像	三春町	四合内 B 遺跡
44	顔付きの鋳型	相馬市	向田 A 遺跡				

展示におけるフィクション活用の試み
—ふくしま復興展「ふくしま平安ものがたり」を例に—



a (プロローグ展示状況)



b (軍団兵士関係展示状況)



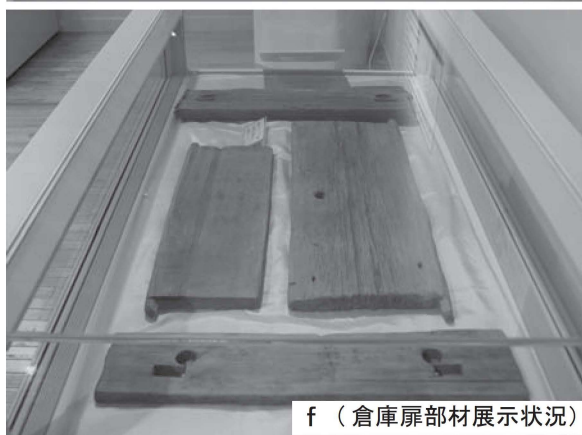
c (農民の生活関係展示状況)



d (製鉄関連鋳型と復元品展示状況)



e (製鉄関連炉壁展示状況)



f (倉庫扉部材展示状況)



g (大型農具・遊具・祭祀具展示状況)



h (エピローグ展示状況)

図3 展示状況

手であった律令農民の生活と税に着目し、白河市旧東村周辺の遺跡から出土した杯・長胴甕・甌などの一般的な土師器のセットや大小の壺・須恵器長頸瓶・耳皿などのやや特殊な土器類、燈明や漆のパレットとして使用された土師器の杯を展示した（図3c）。また、租税の元となる水田経営に絡めて、鋤先・鎌等の鉄製農耕具や、調・庸の布の材料となる糸を撚ったと考えられる鉄製紡錘車、副業としての漁労活動に使用されたと考えられる土錘やたも網の柄を使用状況の絵とともに展示した。さらに平安時代の庶民についての理解を促すため、平安時代のお触れ書きとして有名な加賀郡勝示札の写真を解説文とともに掲示し、当時の禁令を通して見えてくる農村の状況を紹介した。

「製鉄工人のものがたり」は、同時代において全国的にも最大規模であったことが知られている浜通り地方の9世紀の製鉄について扱った。9世紀の製鉄遺構は、前半期が主に踏みふいごが付属する長方形箱形炉で砂鉄から鉄を製錬しており、国家主導の大規模な製鉄事業の最盛期の姿であると理解されているが、後半期は急激に製鉄事業の規模が縮小し、長方形箱形炉に代わって円形小型炉が使用されるようになる状況が明らかとなってきた。今回の展示では、南相馬市の遺跡から出土した長方形箱形炉と円形小型炉の大きさと形状の違いから、鉄の生産量や製鉄技術の違いについて来館者が比較できるように、両炉の炉体がかがい知れる資料を並列展示（図3e）した他、9世紀前半期に官営製鉄所で生産された鉄で製作されたと考えられている梵鐘や獣脚付き容器等の仏具の鋳型と、過去にまほろんで実施した復元実験で得られた復元品を合わせて展示した（図3d）。また、製鉄遺跡に関連して、製鉄遺構の近くで出土することが多い土鈴や鏡形土製品等の特殊な土製品もまとめて紹介した。

「富豪之輩のものがたり」は、律令制の崩壊と中世社会への変化を、同時代史料で「富豪之輩」と呼ばれた富裕層の存在を通して解説するコーナーである。平安時代の後半を想定したが、展示品は9世紀代のもので構成した。地域的には、近年の発掘調査で木質遺物や墨書土器が多数出土している会津地方を対象とし、速報展の意味合いも兼ねた。教科書的には、公地公民を建前としていた律令体制が、重税による公民の逃散や権力者による私有地の集積によって税の徴収システムが崩壊し、そのような社会状況から台頭してきた様々な階層の富裕層が次第に力を持ち、公権力に対抗して武士団となっていくという説明ができる。しかし、これを展示で表現するのは困難であるため、今回は、富裕層に関連すると考えられる倉庫・大型農具・遊具・祭祀具・屋敷の資料を集めた。集積した富の象徴である倉庫は、井戸枳材に転用された鍵穴を持つ扉の部材が発掘されており、これらを初めて展開した状態で展示した（図3f）。併せて鍵の機構について理解できるように、扉の模型を展示品の脇に用意した。集約的農業の存在が推定できる大型農具については、牛が引いて代掻きや施肥に使用されたと考えられるコロバンという出土品も初めて展示した（図3g）。富裕層の余暇については、投壺や賭弓に使用されたと考えられる壺・矢・小弓を展示し、祭祀具としては、斎串や船形・鋤形木製品、人面や渦巻きの描かれた土器を展示した。屋敷については、一辺108mの溝で囲まれた広大な邸宅跡である屋敷遺跡の空撮写真や「大私」という氏族名が書かれた墨書土器を中心に展示した。

最後のエピローグでは、現在の文化財へのいざないを意図し、住居跡から一括で出土した平

安初期の仏教の儀式に使用されたと考えられる土器と、平安後期～末期の墓に収められていた鏡や中世の仏像を象徴的に展示するとともに、福島県内に残る当該期の仏像や堂宇、宗教関連遺跡を写真パネルで掲示した（図3h）。展示のナビゲーターを勤めたハウくんが、モチーフとなった栗木内鏡の中に戻り「ふくしま平安ものがたり」を締めくくっている。

4 フィクションの創作

前述したように、「ふくしま平安ものがたり」では、観覧者である小学生に平安時代のイメージを感覚的に掴んでもらうため、展示テーマから創作した3つのものがたりを各コーナーに掲示した。物語は、小学生の歴史教育がその時代の代表的な人物を取り上げ、その人物の働きを通して各時代を学習していることに注目し、それぞれ「軍団兵士」、「製鉄工人」、「富豪之輩」を主人公にしたものとし、考古資料から類推される平安時代の事象を反映させた作りとした。物語の体裁は、平安時代に成立した最古の説話集とされる『日本霊異記』を参考とした。また、3つの物語はそれぞれ独立したものであるが、貞観地震を作中に盛り込むことで各物語を関連づけた。以下創作した3つのものがたりの全文および挿絵を掲載する。

「軍団兵士のものがたり」

神人旅人（仮名）は、陸奥国白河郡松田郷の農民で、父母、妻子とともに田畑を耕し、山に入り獣をとって暮らしておりました。当時の農民は、稲や布を税として郡の役所に収めていました。また、年間に決められた日数の強制労働や兵役がありました。貞観11年の初夏、旅人は徴兵により郡の役所に集められ、軍団兵士として陸奥の国府多賀城に赴きました。弓の達者な旅人は、弓隊の隊長として国府の端にある港湾施設と船の警備を任されました。一方、残された家族は、旅人が兵役で不在であっても稲で納める税は納めなければならず、自分たちの口分田の他に旅人の分も耕やし、家計の足しに川で魚を採りました。



旅人が兵役について一月ほどたった頃でしょうか、その晩も旅人の妻は、子供達の寝顔を見ながら麻糸をつむいでおりました。すると突然、激しい揺れに襲われました。竪穴住居は傾き、棚から土器が落ちました。貞観地震の発生です。幸運なことに旅人の家族は、無事でしたが、



郷の者には怪我人もでました。数日して壊れた住居等を直していると、郡の役所から早馬が来て、多賀城下を襲った津波に旅人がのまれたことを告げられました。残された家族は、旅人の死が信じられませんでした。旅人とともに出向いた者が帰り、津波のおそろしさを聞かされると、旅人の死の報を受け入れざるを得ませんでした。家族が悲しい報を受けてから2月ほどたった頃、旅



人がひょっこり帰ってきました。なんでも、津岐にのまれた後、握っていた祖父の形見の弓が、近くを漂流する小舟に引っ掛けり、その舟によじのぼって遠く牡鹿郡まで流されたとのことでした。そこで現地の人に助けられ、体力が回復してから徒歩で故郷に帰ってきたため、2月もたってしまったようです。家族が喜んだのは言うまでもありません。旅人は祖父の形見の弓を終生大事にした

ということです。

「製鉄工人のものがたり」

伴部金足（仮名）は、陸奥国行方郡真吹郷の鍛冶屋でした。真吹郷は、飛鳥時代から浜の砂鉄を使った鉄づくりが盛んな地域だったので、その鉄を使って金足は様々な道具をつくりました。また、鍛冶仕事の多い時期には、製鉄技術者の指導の下、炭焼きや砂鉄選別、粘土採掘、羽口づくりなど鉄づくりにかかわる仕事にも従事していました。



貞観11年の夏、大きな揺れの後に襲ってきた大津波は、金足の住む真吹郷をのみ込みました。金足の家族は意事でしたが、郷中の田畑が水に浸かり、多くの郷人が行方不明になりました。役所からの生活支援はあったものの、生活の基盤を失った者たちは一人、また一人と真吹郷を出ていってしまいました。悪いことは重なるもので、国府は津岐以前から森林資源の枯渇しかけていた真吹郷での製鉄事業を放棄することを決定し、製鉄技術者達も他の郡へ去ってしまいました。このままでは生活が立ち行かないと、金足は、郷に残った同世代の若者達と見よう見まねで鉄づくりに挑戦することにしました。彼らは専門技術者ではなかったのですが、踏みふいごや大きな炉で鉄を作ることはできませんでしたが、鍛冶で使う炉やふいごに手を加えることで、なんとか鉄をつくりだすことに成功しました。こうして金足は鉄と鉄の道具をつくりながら真吹郷で生涯暮らしたということです。



「富豪之輩のものがたり」

大私益継（仮名）は陸奥国会津郡倉精郷の馬飼いでした。若い頃は官物を運ぶ綱丁の下で郡家と国府、時には京の間を行き来しておりました。ある時、綱丁である郡司の屋敷で賭博が催され、益継も参加することになりました。益継はみごとに優勝し、獲美に絹織物をもらいました。益継は、その絹織物を元手に大型の農具を揃え、耕す者がいなくなった近くの荒田を借り、人を雇って耕作しました。そのかいもあって、秋には多量の稲が穂をつけ、自宅の一



画に倉を設けるまでになりました。益継は、蓄えた稲を飢饉の地域に運んで売ったり、税の払えない農民に貸し付けたりして次第に財産を増やしていきました。それから数年がたった貞観11年の夏、大きな地震があり海道方面に大きな被害が出ました。陸奥の国司は、国内の富豪に対して私財の献納を求め、益継の元にも1万束の稲の供出が依頼されました。大きな出費でしたが、益継は

被災地への物資の運送も請け負い、国司の信頼を得ました。次の年、私財献納の功により益継は官位を得、会津郡でも有数の富豪となりました。益継は一町四方の大きな屋敷を建てたことから、屋敷長者と呼ばれたということです。

これらの物語を創作するにあたって、重視したのは、展示品と展示品の持つ背景や時代観を盛り込むことであり、物語を通して展示品に興味をもってもらうことであった。また、ある程度のリアリティーをもたせるため、主人公となる人物の名前や出身地については、奈良・平安時代の文献資料や出土品に残された文字資料の内、福島県域に関連するものから設定した。ちなみに、神人旅人は、多賀城出土の白河団木簡に記載された火長「神人味人」をモデルに、伴部金足は『続日本記』や『日本後記』に見られる行方郡の有力者が大伴部であり、その領導下にある者として、大私益継は、屋敷遺跡出土墨書土器からそれぞれ設定した。また各人の出身地は、白河郡松田郷を佐平林遺跡をはじめとする旧東村上出島の遺跡群、行方郡真吹郷を金沢地区製鉄遺跡群、会津郡倉精郷を屋敷遺跡にそれぞれ対応させて考えた。

5 むすびにかえて

「ふくしま平安ものがたり」は、展示にフィクションを用いることで展示理解を促したわけであるが、その効果がどのようなものであったのかは、観覧者全員の意見を聞けない以上、具体的なデータではわからない。しかし、「むかしばなしがおもしろかった。」（千葉県：～10代女性）、「とてもおもしろいコンセプトでした。人物（一般の民衆でも）をとり上げると親近感がでますね。」（群馬県：40代男性）、「3つのものがたり、ドラマチックであり、現実的でもあり、良くできていると感じました。鳳凰が最後に銅鏡に帰っていくのもいいですね。」（白河市：50代男性）等の寄せられたアンケートの意見からは、概ねフィクションを利用することで興味を持って展示を観覧することができていたものと思われる。また、小学生向けとして企画したものの、実際には大人の観覧者から「分かり易い」というご意見を多くいただいたことから、フィクションの利用は大人の観覧者の展示理解にも効果があることがわかった。今後とも福島県の歴史や文化財保護思想普及のため、様々な手段を講じて、見て楽しく新たな発見のある展示を組んでいきたい。